ほんじゅ～る　2011年（平成23年）5月20日発行（2）

東日本大震災の被災地におもむいて

内藤　万砂文
（長岡赤十字病院）

言葉を失います。まるで空爆の跡です。中越、中越沖地震の比ではありません。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

発災直後から5回の出動の機会を得ました。計15日間を石巻赤十字病院で、5日間を釜石市で過ごし被災地の現状に触れました。石巻市街地だけでも1万人超の命が奪われたと地元では言われています。岩手県大槌町は焦土と化していました。実情は報道よりもはるかに深刻です。悲惨です。私たちが知っている地震災害とは様相を異にしています。家屋倒壊や道路損壊が少なく、被害のほとんどが津波によるものです。すなわち、命を落としたか、軽症ですんだかのいずれかです。地震災害にありがちな重症外傷は少なく、低体温症が多くみられました。すべてを奪われた状況であるにもかかわらず、行政機能が失われたため情報発信も支援要請も出せませんでした。結果的に避難所の孤立が長引き、物的支援も大幅に遅れました。発災後2か月が経過しましたが、いまだに避難所の数は減らず、衛生環境も決して良好とはいえません。とくに下水設備が復旧しないためトイレの問題は深刻です。救護所では被災者は問わず語りに、実に淡々と話されました。家族や家を失った方がほとんどです。津波に巻き込まれながらもかろうじて逃げた、目の前で家族をさらわれた、命があるだけ幸せだ……、あのとき死んだほうがよかったかも……。

傷病者であふれた石巻赤十字病院の外来フロア

焦土と化した岩手県大槌町

被災地の惨状はまだまだ想定を超えています。

当院は赤十字病院ですが、新潟県の基幹災害医療センターにも指定されています。災害時に頑張らなければ存在意義のない病院です。これまで、石巻市、釜石市、福島市などに10班の救護班を派遣しました。また、その他にも被災地の病院支援要員や業務調整要員として多数の職員を派遣しています。看護学校の教員や学生も参加しました。今後も職員全員で被災地を支援していきます。今回の災害では、全国から多くの医療支援が被災地に入り大活躍をしてくれました。長岡からも医師会JMATや長岡中央綜合病院、立川綜合病院が支援に駆けつけて下さいました。

この場を借りて御礼申し上げます。

未曾有の大災害であるため、今後も長期間にわたり息の長い支援が必要となります。被災地の医療者は被災者でありながらも懸命に地域医療を支えようと不眠不休で働いてきました。もはや限界です。全国からの支援医療班もそろそろ息切れし撤退を表明する救護班が目立ってきました。6月以後も必要な医療支援が集まるかどうか不安な状況となってきています。中越地震、中越沖地震において被災地となった新潟県は全国から多くの支援をいただきました。今、恩返しをしなければ返す機会はありません。会員の皆様には今後ともご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

石巻市街地の道路に打ち上げられた大型漁船

（3）2011年（平成23年）5月20日発行　ほんじゅ～る

原発が爆発しますよ！

江部克也
（長岡赤十字病院）

今回の東日本大震災に際して、赤十字救護班として内藤救命救急センター長が、DMATとして私が、発災約2時間後に当院から出発しました。

DMAT本部から指示された参集拠点の福島県立医大には、道路事情もあり、夜半に到着しました。しかし、津波被害が主であった今回の震災では、DMATのスキルを生かせる場面はあまりありませんでした。

翌朝、日赤医療センター、横浜みなと赤十字病院のDMATチームの各リーダーと相談し、DMAT本部の指揮を離れ、日赤救護班として活動することにしました。赤十字福島県支部からの指示は、後続の名古屋赤十字救護班とともに、海岸沿いで宮城県境にある福島県新地町に救護所を立ち上げる、というものでした。

新地町では、役場周辺は比較的おちついていましたが、そこから約1kmある海岸までは、見渡す限り瓦礫の平原でした。

長岡チームが合同救護班の指揮をとり、町長への到着報告と情報収集、役場内での救護所設営などを行いました。さらに、周辺の避難所に数千人の被災者がいるとの情報があり、仮の本部要員を残し、医療チームを順次派遣することにしました。

ところが、最後のチームの出発間際になって、町側から「原発が〈爆発〉するかもしれない、という内々の情報が入った」と言われました。

この時点では、テレビ・ラジオからは、危険性についての報道はなく、赤十字本社も情報をつかんでいませんでした。まもなく後続の名古屋赤十字が到着するとの連絡もあり、先着隊として周辺の情報収集が優先すると判断し、結局全チームを送り出してしまいました。

しかしその直後に、赤十字本社から「あれこれ探ってみると、〈非常に憂慮すべき状態〉らしい、至急離脱するように！」との指示が入り愕然としました。

ちょうど到着した名古屋赤十字救護班をすぐに避難させ、ひと安心したものの、その時点では、巡回チームとは、まったく連絡がとれなくなっていました。まだ発災後24時間しかたっておらず、医療ニーズが大きく、大忙しだったそうです。結局連絡がつかないまま、情報が入ってから約2時間後に爆発は起きてしまいました。

現在では、新地町は原発から30km以上離れていることもわかっていますし、水素爆発だけで被曝もありませんでした。しかし、当時の乏しい情報のなかでは、「原爆にやられるように、爆死するんじゃないか」と思っていた隊員もいたそうです。

情報が乏しい段階では、人員を分散させない、分散する場合には頻繁に定時連絡を入れさせるなどの配慮が必要であったと、リーダーとして反省しています。

赤十字の公式見解は、〈被災住民を残し医療班だけ避難するのではない。情報収集のため他の地域に転進である〉、でしたが、現場では当然そんな解釈はしません。こればかりは、他人まかせにはできず、合同医療班を代表して町長に撤収を伝えました。その時の町のスタッフの表情は忘れることはできません。

整然と後始末をして、きちんとあいさつをして撤収したはずなのですが、現在、町と赤十字の関係は、あまり良好ではないそうです。

万一の被爆を避けるために撤収の判断は必要でしたが、今でも悔しい気持ちはあります。他の隊員も、「またくるからね」と言ったまま、急いで撤収したまま戻れなかったことを、気に病むことがあるそうです。

なお、差し迫る状況の中、できるかぎり危険を避けるため、ひとりでも多くのスタッフを、少しでも早い退避を勧めました。しかし、すべてのチームは、所属の隊員がそろうまで残ってくれました。安全面からは感心できませんが、心意気には感謝しています。

山越えをして宮城県白石市に到着後、翌日は巡回診療を行いました。放射能についての情報がなかったため、安全を期して米沢経由で長岡に戻りました。

初動は2泊3日の活動で終了しました。医療班としては充分な活動ができたとは言えませんが、リーダーとして得るものが多かった活動でした。

ほんじゅ～る　2011年（平成23年）6月20日発行（2）

医療救護活動の一日

坂爪　香
（長岡中央綜合病院）

平成23年4月18日、寝袋の肩口にあいた隙間から冷たい風が入り、起床時間の1時間前から目が覚める。他県の医療救護チームと公民館で寝泊りを共にしており、起床時間の5時を待って支度を始める。朝ご飯はパックのご飯とレトルトのカレー。食後に片付けをし、早めに支度ができたので車で石巻の海岸近くを見に行くことにする。4月も後半というのに、外にはうっすらと雪が積もり、息が白い。海岸に近付くほどに瓦礫と汚泥が増え、海岸沿いではそれ以外の物はなくなっている。防砂林の松の木には、様々なゴミとともに逆さになった高級車がぶら下がっている。ここは本当に日本なのだろうか。津波は何もかもを流して持っていくだけではなく、代わりに瓦礫や汚泥を残していくため、車外に一歩出れば町中に悪臭と粉塵が充満している。テレビで見ていた以上の現実を肌で感じ、午前中の診療をするため担当の避難所に向かう。所々で信号は未だ作動せず、大きな交差点のみ警官が交通誘導を行っている。津波が到達しなかった区画はほとんど平常と同じようだが、路地を1本挟んだだけでも、津波が来たエリアは状況を異にする。道路の両脇には、泥だらけの車や家財道具が積まれ、車がやっと1台通れるくらいにまで狭くなっている。まだ水が引かずにぬかるんでいる所、大潮で再び冠水してしまう道路もある。迂回を繰り返し、両脇がすれすれの道路をやっと抜けて避難所にたどり着く。担当となった小学校は、津波が1m30㎝程まで達したため、小学校の近隣には瓦礫や汚泥も積まれ、流されてきたボラが異臭を放っている。

大潮で冠水した道路

瓦礫の壁

教室の一つに設置された診療所には、小さな石油ストーブが一つあるのみで、屋内とはいえ、寒くて上着は脱げない。診察台は、工作室にある6人掛けの大きな木の机を毛布で被ったもの。受診する患者さんは1日10数名、避難所の人と近所の人が半々。主訴としては上気道症状が半数以上を占めていて、他は常用薬が不足しての処方希望である。診察していると、症状に困って受診するというよりは、毎日肩を寄せ合っている避難所以外の人と話をしたい、不安を聞いてもらいたいという様子の人もかなりいる。一通り話すとホッとした表情となって帰っていく。診察の合間に見て回った校舎内や近隣の様子からは、それも当然とわかる。ライフラインはだいぶ復旧したが、下水にまだ不備があるためトイレで大便は行えず、トイレ内に張ったテントに簡易トイレを設置してある。しかし、臭いもひどくて行きにくい。やっと設置された仮設トイレは校庭で、教室からは少し離れ、行くためには屋外に出なければならない。夜間や天候が悪い時など不便この上ない。避難所の人は、そんな理由からトイレをぎりぎりまで我慢したり、夜は何人かで行くようにしているそうだ。避難所となっている教室は、敷き詰められた毛布が万年床で、外の悪臭や粉塵のため換気もしていない。身体的にはもちろんのこと、精神的にも間違いなく悪い環境である。一時は避難していたが自宅に戻った人も多いと聞き、避難所の近隣の自宅も巡回してみる。ほとんどの人は、診療を再開した近隣の医療機関に受診できており、巡回診療までは不要な様子である。

夕方になり、石巻の医療の拠点となっている石巻日赤でのミーティングに参加するため、避難所を後にする。普段であれば20分程で到着する

（3）2011年（平成23年）6月20日発行　ほんじゅ～る

距離を、道路状況の悪さや支援活動の終了による移動の車で混雑し、倍以上の時間をかけてやっと到着する。石巻日赤では、医療コーディネーターの専属医師が統括し、感染症動向や各専門分野の医師チームの巡回の情報（精神、糖尿病、眼、歯など）、避難所にいる障害者や要介護者などの把握、診療所がある避難所での今後の防災まで、多岐に渡って検討・把握・調節を行って情報提供をしている。その日の新しい情報を聞き、宿泊所としている公民館へ向かう。カップラーメンやカップパスタで夕食を済ませてから、チームでミーティングを行い、就寝の準備をする。寝袋に体を横たえると眠気が襲い、22時の消灯を待たずに眠っている。余震や物音で何度か目が覚めるが、またいつの間にか眠りに就く……。

診察風景

穏やかな日差しと澄んだ空気の中、新しい海岸沿いをのんびりと散歩する夢を見ながら……。

災害医療支援

小黒武雄
（立川綜合病院）

平成23年4月22～24日宮城県石巻市に医療支援に行かせて頂きました。災害医療に精通している人の話を聞いたり、災害医療活動の書を読んだり、一緒に活動を行う仲間と話しながら、自分たちに何ができるのかを考えました。一人の人間として困っている人に自分のできることをするということにつきました。

医療の原点に立ち返ることができるような経験でした。

ただ話すだけでほんの一瞬でもhappyな時間を一緒に共有することができたのなら、少しは役に立てたのかなと思っています。人と人との関わりとはそういった時間を一緒に作り上げていくことなのかもしれない。そんなことを思っています。

心的外傷後成長なる概念があります。心的外傷を負うような出来事を経験することにより、以前より人生をありがたく思うようになり、人をより愛することができるようになることであるそうですが、そんなことを切に願いながら、私の報告とさせて頂きます。